シンポジウム特集記事 総説

2013 年北海道礼文町浜中 2 遺跡の発掘調査を利用した
学校向け考古学教育普及プログラム岡田 真弓^{1*}, 藤澤 隆史², 加藤 博文¹¹ 北海道大学アイヌ・先住民研究センター² 礼文町教育委員会

(平成 26 年 5 月 12 日受付, 平成 26 年 5 月 19 日受理)

要 約

北海道礼文島に所在する浜中 2 遺跡の学術調査が行われた 2013 年 7 月から 8 月にかけて, 筆者らは礼文町の小中高校向けの考古学教育普及プログラムを実施した。遺跡や出土遺物を利用した考古学教育の目的は, (1) 実際に行われている発掘調査に触れることで考古学や人類学への理解を促進する, (2) 礼文町で実施されている総合学習「礼文学」が目指す郷土史理解を支援する, (3) 礼文町の文化遺産とその保護の重要性を喚起する, ことである。本稿では, 考古学と地域社会との連携に関する昨今の動きを概観してから, 昨年度実施した小中高校生に対する考古学教育普及プログラムを紹介し, 最後に今後の課題と展望を述べる。

キーワード: 北海道礼文町浜中 2 遺跡, 小中高校, 考古学教育普及プログラム, パブリック考古学, コミュニティ考古学

Archaeological education program for the primary and secondary schools
using ongoing excavation site at the Rebun island in 2013Mayumi Okada^{1*}, Takashi Fujisawa², and Hirofumi Kato¹¹Hokkaido University Center for Ainu and Indigenous Studies²Municipality of Rebun Town, Board of Education

(Received 12 May 2014; accepted 19 May 2014)

Abstract

This paper discusses about archaeological education programs for the primary and secondary schools using “ongoing” excavation site which have been conducted at the Rebun island in 2013. The international archaeological research project at the Hamanaka 2 site of the Rebun island aims not only to study a dynamism of history and culture there through material analysis but also to involve local people and the Ainu people into our project in scheme of Public archaeology and Community archaeology. This archaeological education program was organized together with the board of education of the Rebun town and 4 primary and secondary schools. Its goals are to (1) promote understanding archaeology and natural anthropology through experience of ongoing excavation site, (2) assist understanding local history that primary and secondary schools of the island are teaching at comprehensive school hours, (3) call an attention for protecting local heritage.

*北海道大学アイヌ・先住民研究センター
〒060-0808 北海道札幌市北区北 8 条西 6 丁目
E-mail: m-okada@let.hokudai.ac.jp
©2014 The Anthropological Society of Nippon

Key words: Hamanaka 2 site of the Rebun town Hokkaido, the primary and secondary schools, archaeological education program, Public archaeology, Community archaeology

はじめに

昨今、「パブリック考古学」や「コミュニティ考古学」と呼ばれる考古学の領域において、考古学と現代社会との関係性に着目した議論が活発に行われるようになっていく。その背景には、埋蔵文化財を保護していくためには地域社会の理解と支援を得る必要があるという考え方が考古学や埋蔵文化財行政の中に広まりつつあること（馬場，2011；松田・岡村，2012），さらに考古学や埋蔵文化財が地域の公共資産，すなわち地域社会の文化遺産として社会教育，地域活性，そして観光産業振興に果たす役割が認識されてきたこと（白井，2013），の 2 点が大きく関係していると考えられる。

2007 年に文化庁が報告した『埋蔵文化財の保存と活用（報告）：地域づくり・ひとづくりを目指す埋蔵文化財保護行政』においても，埋蔵文化財の教育的資産の意義として，「埋蔵文化財を通して，現在の生活の礎を築いた祖先に対する畏敬の念を育み，生きる知恵や力，あるいは自然との共生や生命への尊厳などの心を学ぶこともでき（る）」（『埋蔵文化財の保護と活用（報告）：地域づくり・ひとづくりを目指す埋蔵文化財保護行政』第 1 章第 2 項）ことが指摘されている。また，同報告書では，体験発掘などの学習事業を通じて，「埋蔵文化財の内容や先人たちによりその土地が今日まで守り伝えられてきた背景を知ることは，住民の文化財保護意識の向上に貢献することも期待される」（同上）と述べられている。

ただし，20 世紀初頭から始まった日本における郷土教育においては，すでに地域社会に対する考古学の教育普及活動が積極的に取り入れられていた（西川，1986）。また，1950 年代ころからは，発掘主体者として，各地の教育委員会や大学と同様に，中学校や高校も携わっていた（白井，2012）。岡山県の月の輪古墳や長野県の野尻湖などにおいては，地域住民を中心に，教師，学生，小中高校の生徒らが考古学調査に関わり，郷土史を自ら発見する体験をした。こうした調査の中には，社会教育的効用だけでなく，考古学的に見ても学術的価値が高いものもあった（森本，2001）。

本稿では以上のような歴史的経緯を踏まえた上で，2013 年度に北海道礼文町の小中高校向けに実施された浜中 2 遺跡の発掘調査を活用した考古学教育普及プログラムについて報告し，その意義と展望を述べたい。

考古学教育普及プログラムの実施経緯

2011 年より，北海道大学とアルバータ大学（カナダ）を中心とした国内外の諸大学が，浜中 2 遺跡で国際共同発掘調査を実施している。浜中 2 遺跡発掘調査の目的には，アイヌ民族の形成過程を人類史的・歴史学的に解明する研究の実施だけでなく，その研究が地域に根差した考古学であるための教育的・広報的アプローチの構築が含まれている。そのため，筆者らは（1）考古学活動を用いた教育普及活動，（2）遺跡および発掘調査に関する情報の発信，（3）観光資源・教育資源としての遺跡活用，以上 3 点を柱に研究活動を行っている。

発掘調査が開始された 2011 年より，北海道大学の調査団と礼文町教育委員会は，小中高校の先生と話し合い，地域に根差した考古学，特に学校教育と連携した考古学教育普及プログラムの実施について検討してきた。その結果，学校教育の中に考古学を盛り込む機会として，『礼文学（ふるさと礼文を教材にした地域学習）』が提案された。礼文学は，（1）ふるさと礼文に学ぶ活動を通して，ふるさとへの誇りと夢を見出し，21 世紀を逞しく生きる力を育てる，（2）「地域を明るくする」主人公であり，地域の一員であるという自覚を育てる，ことを目的としている。学校教育の中では，総合的な学習の時間を中心に，各教科および道徳，特別活動等，全ての領域において可能な限り，ふるさとを学ぶ学習に位置づけられている（礼文町教育研究会礼文学連携部会『平成 23 年度礼文町の小中高における「礼文学（ふるさと礼文を教材にした地域学習）」の内容系列表・改訂版』）。礼文町の産業，環境，歴史などを基幹テーマとして，小中高校毎に学習内容が構成されている。小学校と中学校の礼文学の学習内容に郷土史学習が，中学校と高校の学習内容には生徒たちが郷土の歴史や文化を学び観光資源として表現することを目指す「礼文観光大使活動」が設けられている。将来的には，考古学の教育普及プログラムをこうした礼文学の授業の一環として展開していきたいと考えている。

初年度の 2013 年は，発掘調査を活かした考古学教育普及プログラムが，礼文学とどのように連携できるかを検討しつつ，合計 4 つの小中高校に対してプログラムを実施した。プログラムの目的は，（1）実際に行われている発掘調査に触れることで考古学や人類学への理解を促

進する、(2) 礼文町で実施されている総合学習「礼文学」が目指す郷土史理解を支援する、(3) 礼文町の文化遺産とその保護の重要性を喚起する、ことである。

考古学教育普及プログラムの実施

1. 小学校

小学校では、香深井小学校（全校生徒 10 名、教員 8 名）と礼文小学校（5 年生・6 年生 20 名、教員 2 名）が考古学教育普及プログラムに参加した。プログラムは、7 月 16 日の第 5 時限目（13:40～14:25）に香深井小学校の体育館で行われた。小学校 1 年生から 6 年生まで受講するため、20 分の講話と 30 分の体験実習に分けて、生徒たちの興味が継続するようにプログラムを構成した。20 分の講話では、物質文化から歴史を考察する考古学という学問を様々な事例を用いながら紹介し、さらに出土物の種類やそこから復元できる過去の人類史について説明した。次に、礼文町教育委員会から借用した礼文島内で出土した縄文土器を用いた体験学習を行った。これは、遺物を詳細に観察するという考古学研究の手法の一つを模擬体験してもらうための体験学習であった。図 1 にあるように、グループ分けされた生徒たちは、各グループに割り当てられた縄文土器を観察しながら、どのように文様が作られたのかを考え、粘土、原体、木べら等を用いながら油粘土で再現を試みた。

2. 中学校

中学校向けのプログラムには、香深中学校の全校生徒 25 名および教員 5 名が参加した。実施日は、7 月 29 日の午前中（9:00～11:30）であった。中学校段階での礼

文学の学習内容には、「ふるさと礼文を知る（礼文の歴史を学び、次世代に語り継げるようにする）」という題材が含まれているので（礼文町教育研究会礼文学連携部会『平成 23 年度礼文町の小中高における「礼文学（ふるさと礼文を教材にした地域学習）」の内容系列表・改訂版』、考古学資料を用いて地域の歴史を重点的に伝えることができるプログラム構成を目指した。プログラムの前半 50 分は、調査団が資料整理室として使用している上泊小学校の体育館において、考古学に関する講話と出土遺物見学を実施した。考古学研究の基本的な概念を説明した後に、礼文町にある遺跡と出土遺物を紹介しながら礼文町の先史時代について説明した。講話の後に行った出土遺物見学の際に、中学生たちは考古学と人類学研究者による解説を聞きながら、遺物の種類やその見分け方などを学んだ。後半の 50 分間は、浜中 2 遺跡の発掘現場へ移動して体験発掘を実施した。体験発掘で、中学生たちは調査に参加している大学院生や研究者から発掘の方法を教わったり、出土した遺物に関する説明を受けたりした。

3. 高校

礼文高等学校でのプログラムには、全校生徒 26 名および教員 2 名が参加した。プログラムは、7 月 24 日の第 5 限と第 6 限目（13:00～15:40）を利用して、上泊小学校体育館にて実施された。前半の 50 分は、周辺地域と礼文島との歴史的関係性に関する講話、残りの 90 分間は、考古学、動物考古学、形質人類学の各研究者による 2011 年浜中 2 遺跡出土の遺物を用いた考古学の研究方法に関する説明が行われた。出土資料の紹介では、生徒たちは実際に遺物に触れたり、観察したりしながらその研究方法を学んだ。高校生向けのプログラムでは、

図 1 礼文町出土の縄文土器の文様復元に取り組む香深井小学校と礼文小学校の生徒たち（香深井小学校則座克己教諭撮影・提供）

図 2 浜中 2 遺跡で発掘体験をする香深中学校の生徒たち（筆者撮影）

図3 礼文島の人類史に関する講話を聴く礼文高等学校の生徒たち（北海道大学岩波連氏撮影・提供）

考古学を中心に総合人類学のおよび世界史的な視点を盛り込み、さらに埋蔵文化財を地域の文化遺産として捉える考え方を喚起できるようにした。高校段階の礼文学の学習内容には、「礼文観光大使活動（ふるさと礼文の良さを学び、自己表現力を育てる）」（上掲）という題材が設定されている。そのため、高校生たちに埋蔵文化財は地域の文化資源であることを認識してもらい、将来的に浜中2遺跡を地域の文化遺産として表現してもらえるように、プログラムを作成した。

おわりに：課題と展望

最後に、各学校の教員の方々から指摘いただいたプログラムに対する評価をもとに、2013年度に実施した発掘調査を利用した学校向け考古学教育普及プログラムの課題と展望についてまとめたい。なお、プログラムに対する評価は、参加した各学校の担当教員の方々にアンケート形式で行っていただいた。

まず、小中高校からいただいた共通の評価は、「普段の歴史学習では体験できない考古学という視点からの歴史学習ができた」という点である。ただし、考古学そのものになじみが薄い生徒が多かったため、講話が「少し難しい」という評価であった。この点に関しては、学校の通常の授業で生徒たちが学ぶ内容と本プログラムの内容を十分にすり合わせる必要がある。また、講話の段階から出土遺物などを効果的に用いることで、より理解度が進む可能性はある。

体験学習については、概ね「満足」という評価であったが、課題も残っている。現在進行形で行われている発掘調査を用いた考古学教育普及プログラムの特徴は、普

段見ることができない遺跡の状況や出土遺物を間近に触れることができ、考古学や人類学への理解が進みやすいことである。しかし同時に、発掘調査の進捗状況や天候によっては、体験発掘ができないこともある。今回、発掘調査期間が学校の夏休み期間と重複したため、体験発掘をすることができたのは、本プログラムを課外活動として実施した香深中学校だけであった。小学校と高校のプログラム実施時期は、発掘現場では調査区の設定および掘り下げ開始時期にあたり、安全面などに鑑みて発掘現場での実施は見送った。その代り、礼文町出土の縄文土器を観察して粘土で復元する体験学習および一般的にはなかなか見学することができない出土遺物の整理作業の見学を実施した。2つのプログラムとも「満足」という評価をいただいたものの、「発掘現場に連れていくことで、生徒たちの意識もさらに変化したかもしれない」という意見もあった。この点については、講話を授業内に、体験学習としての発掘を授業外に行うなどの改善を試行していきたい。

学術調査を活用した考古学教育普及プログラムを小中高校の授業と有効的に連携させるためには、いまだ課題が残っている。今後も改善を重ねて、多面的な教育資源となる考古学教育普及プログラムを作成し、継続的に実施していきたい。

謝 辞

本稿で紹介した学校向け考古学教育プログラムを実践するにあたり、ご高配を頂きました礼文町教育委員会、香深井小学校、礼文小学校、香深中学校、礼文高等学校の関係者の皆様に厚く感謝の意を表します。

なお本研究は、日本学術振興会研究拠点形成事業（先端拠点形成型）の助成を受けたものである。

参考文献

- 馬場憲一（2011）地域社会における史跡の認識過程と保護のあり方：文化財の保存・活用の新しい動きを視野に入れて。現代福祉研究，第11号：9-32。
- 松田陽・岡村勝行（2012）入門パブリック・アーケオロジー，同成社，東京。
- 森本和夫（2001）遺跡と発掘の社会史：遺跡捏造はなぜ起きたか，彩流社，東京。
- 西川宏（1986）学校教育と考古学。近藤義郎他編，日本考古学7：現代と考古学，岩波書店，東京，pp.169-208。
- 白井克尚（2012）相川日出雄の郷土教育実践を支えた考古学研究：「考古学と郷土教育」を手がかりに。社会科教育研究，第115号：90-102。
- 白井克尚（2013）社会科教師の専門性形成に「考古学」を活かす：愛知県埋蔵文化財調査センターとの連携を通して。探求，第24号：24-31。